

ゆえ 第五十七号



東京都立大学 文藝部

目次

第二次火星独立戦争 6

深山わたる

P5~7

【これまでのあらすじ】

独立を宣言した火星諸国連合は火星周回軌道上の施設を次々と制圧し、アメリカ宇宙軍とヨーロッパ宇宙軍の艦艇に対する攻撃を開始した。火星諸国連合を支援する木星軍事機構の到着により火星諸国連合は地上の都市と軌道の基地を制圧することに成功。しかしアメリカ合衆国とヨーロッパ連合が派遣した大艦隊は目前に迫っており、予断を許さない状況であった。

白南風ドロップス 10.

大塚慎太郎

P8~11

【あらすじ】

同じ学生寮の後輩が悩みを打ち明けた。それは、自身の所属する

演劇部での鍵紛失と大道具の破壊だった。可愛い後輩のためと捜査に乗り出したは、同室の湯ノ宮陽鞠と藤崎美乃。

鍵が紛失した日に、部室でプレゼントと思われるものを見たという証言から、まずはその贈られる先を当たることにした。

生命の星たちに 2

深山わたる

P12~15

【これまでのあらすじ】

恒星HD4628に滞在するくじら座天文探査艦隊第一分艦隊は、二百年前に恒星HD3443に向けて旅立った第一三分艦隊からの通信を受け取る。その内容は第一三分艦隊が原住知的存在の攻撃を受けたというものだった。第一分艦隊は第一三分艦隊の救助のために第一四分艦隊を結成。生物学者のワリス・サマターは防衛部の強硬策を阻止するため、生物参謀として第一四分艦隊に参加する。

【休載連絡】

アンダマン作『輝けるプロメテウス』

神戸牛若丸作『ロリータ・キルズ・ミー』

しゅわるべ作『時をかける列島』

有音紫苑作『神さまのいる世界』

大和武蔵作『A i n S o p h A u r』

朝霞作『事件簿バレット』

矢島シューヘイ作『エスケープ・オブ・ロボッツ』

以上は作者の都合により休載いたします。次号にご期待ください

第二次火星独立戦争

深山わたる

【登場人物紹介】

ヴァレリオ・アルメンタ

ヨーロッパ宇宙軍大佐。戦闘艦《アマネセル》艦長。

オットマー・ヴァルター

ヨーロッパ宇宙軍少将。第二次火星派遣艦隊司令官。

ケーオナワラット・ポーサワン

木星軍事機構中将。第二九特別任務艦隊司令官。

カナ・カンザキ

火星諸国連合宇宙軍少佐。軽戦闘艦《オイシン》艦長。

フェリシア・マルティネス

火星諸国連合防衛大臣。

6 『決戦前夜』

※

歴史上行われた宇宙艦隊戦の数は少ない。

火星開拓戦争におけるダイモス争奪戦、七星連合結成戦争におけるシルヴィア奪還戦およびオットイリア艦隊戦、木星企業間戦争におけるイオ攻防戦、海賊戦争におけるヒルダ攻略戦、第二次火星独立戦争における火星系外縁挟撃戦および《ラケダイモン》包囲戦。た

ったの七回だけだし、そのうち二回は現在進行している第二次火星独立戦争で戦われたものだ。

だから今、八回目の宇宙艦隊戦である火星系艦隊戦が始まろうとしている火星には、全太陽系の注目が集まっていた。各国の軍人は貴重な戦訓を得ようと聞き耳を立てていたし、政治家や経済人は決着の行方と影響を注視していた。そして無邪気な大衆は、華々しい艦隊決戦の始まりに興奮を隠しきれていなかった。

※

二二二三年一月二三日一三時〇〇分UTC

アウレール・ヴァルターは一人きりの昼食を終えると、自室に戻って研究を再開した。博士課程に進学してからまだ三ヶ月しか経っていないが、手を抜くつもりは無い。アウレールには情報政治学という分野に並々ならぬ関心があったし、情報政治学を使って人類を幸福にしたいという使命感があった。

しかし、少し気を抜くとニュースをチェックしてしまうし、宇宙の彼方で起こっている戦争のことを考えてしまう。彼の研究対象には火星のことも入っているからそれは全く悪いことではないのだが、とはいえ全く個人的な理由のためではあった。

特に南方諸国のメディアによって第二次火星独立戦争と呼ばれているこの戦争は、開戦から一月半ほどが経過していた。すでに火星

諸国連合がアメリカ合衆国とヨーロッパ連合が保有していた全ての都市と軌道駅を掌握。またヨーロッパ宇宙軍の軌道要塞《ラケダイモン》、合衆国宇宙軍のデラニー軌道基地を制圧していた。アメリカとヨーロッパが火星からほとんど締め出された格好だ。このあたりの状況は連日報道されていたのでよく知っている。

未だに地球社会で大きな影響力を持つアメリカ合衆国とヨーロッパ連合が、火星領有地市民に遅れをとったのだ。もちろん、火星領有地市民だけで成し遂げられることではない。彼らには木星系統治複合体という強力な後ろ盾がある。

木星系統治複合体は複数の木星開発企業が経営を統合し、宇宙政治学で言う所の「ガバナイズ」を起こしたことで誕生した国家的組織だ。木星という厳しい環境にありながら、合理的かつ強力な統治により誕生から五〇年の間に急成長した。巨大な経済力と精強な軍事力を整え、今まさに版図を拡大しようとしている最中の国家だ。

無論、第二次火星独立戦争もまた、その一環として起こされた戦争である。

木星系では核融合燃料である水素とヘリウム、人間の生存に必要な水、農業や工業に必要なアンモニアや炭化水素、硫黄などの物質は豊富に採集することができる。一方で木星系は金属資源に乏しく、これらは地球や火星、主小惑星帯からの輸入に頼っている。火星や主小惑星帯はほとんどが地球国家の支配下だ。木星系統治複合体としては、より政治的・位置的に近い金属資源の供給源が欲しい所であった。そのために、木星は地球諸国の星外領有地の独立を支援し

て味方につけようとしている。

火星諸国連合もそのような思惑は知っているのだろう。彼らは独立戦争に勝利した後、木星に搾取されずに、あるいは木星に依存せずに、自立することができるのか。アウレールはそれを望んでいたが、また別の望みもあった。

今はこの星にいない、父オットマー・ヴァルターのこと。あるいはヴァレリオ・アルメンタ大佐のこと。彼らが乗り込む艦隊が地球から火星に向けて旅立ったのは一月前のことだ。火星と木星は本気で、アメリカとユーロも本気。だから五〇隻近くの船がぶつかり合うことになる予定だった。

地球の本国に直接の被害が及ぶことはまず無いためほとんどの市民は気楽なものだが（今も家の外から子供が遊ぶ声が聞こえる）、身内や知人に軍人がいるアウレールとしては気が気ではない。現代の宇宙戦ではそれほど多くの死者は出ないのだが、それでもやはり胸が苦しいのだ。

アウレールは机上端末を叩き、データの解析を進める。紛らわしているのかもしれない、という思考が頭をよぎったが、だからといって止める理由にはならなかった。

二二二三年一月二三日一八時〇〇分UTC

宇宙船の存在の秘匿というのは難しい。核融合エンジンが大きな

熱を生み出すため、赤外線で明るく光ってしまうのだ。高出力の核融合エンジンを搭載する軍用船なら尚更のことである。しかし、方法が全く無いわけではない。

その宇宙船は小惑星パラスから地球に向けて航行していた。加速噴射の際の全放熱量から推定される核融合エンジンの出力は大型貨物船と同程度。改正宇宙法によって発信が義務付けられている光ビームの強度は規定の下限に近く、接近したどの船舶もその宇宙船の情報を取得できなかった。しかし皆、ランプの使用期限が近づいているのだろうかに留めなかった。

また、パラスを出発した後の加速より地球に到着する前の減速の方が加速度が遥かに大きく、途中で貨物を丸ごと投棄していなければ説明が付かないような状態であった。しかしその宇宙船を継続して監視しているような暇人はおらず、そのことに気付く者はいなかった。

主小惑星帯内縁を航行中に宇宙船から放出されたそれは、核融合推進よりずっと低温の化学推進によって減速し、火星に向けて軌道を遷移した。それは強力な赤外線源である核融合炉を搭載しておらず、電力はフライホイール・バッテリーからの供給で賄った。

化学推進が生産するデルタバイは小さいので、火星系に最接近するまでは時間がかかった。だからそれを動かす人々はひたすら待った。薬物と機械により代謝を低下させ、艦体の温度が上昇しないように努めた。また冷却材によって熱を移動させ、放熱板を火星から見えないように遮蔽することで探知を逃れた。

そして火星系に最接近する瞬間、それは目覚めた。合衆国宇宙軍、《ハウンド》級ステルス狙撃艦《ウルフ》。目標に冷たく接近し、魔弾を撃ち放つのがその仕事だった。

目標は火星諸国連合軍と木星軍事機構の艦隊が停泊する軌道駅および軌道基地。すなわちマクラウド軌道駅、マッサリア軌道駅、エマソン軌道駅、《ラケダイモン》、そしてデラニー軌道基地。

あらかじめキャパシタに蓄電されていた電力を使って、質量一〇〇キログラムの投射体が五発、秒速一〇〇キロメートルという速度で次々と打ち出される。各投射体を持つ運動エネルギーは五〇ギガジュール。

戦果確認。軌道施設。デラニー軌道基地中破。マッサリア軌道駅中破。《ラケダイモン》小破。宇宙艦艇。戦闘艦七隻大破。仮設戦闘艦二隻大破。補給艦二隻大破。強行結合艦一隻大破。中破以下損害評価不可。

火星との距離が少しずつ開いていく。《ハウンド》級は秘匿性のために攻撃力・防御力・機動力の全てを犠牲にした船だ。この五発以上の攻撃はしないし、できない。しかし乗員たちはこの戦果に満足していた。運動エネルギー弾による攻撃は命中する確率が低い。最善を尽くしたとしても一発も当たらない可能性もあったのだ。

「運が悪かったな。火星人」

合衆国宇宙軍屈指の忍耐力で知られる艦長のアデライン・プロバート大佐はそう言うと、低温冬眠の準備に入った。

《続く》

十、ぬるくなったレモン水

畳の上に正座した陽鞠は、美乃に正面に座るよう促した。彼女の前にメモを開いて置く。

「そもそも玉川は、遠藤に贈ろうとしていたのよ」

「え、誕生日プレゼント？」

「そう」

小百合の誕生日は七月三日。定期考査が終わり落ち着いた時分に渡そうと考えていたのなら、妥当な時期である。

「あそこ、きつとあんまり仲が良くないのよね。……深くない、と言いましようか、それこそ紅茶が嫌いなことを知らないレベルで」

「ほう」

「美乃、あんた良く知らない人に対して贈り物をするってなったら、何を包む？」

「カタログギフトは妙案だと思う！」

美乃はつい先ほど学んだ贈り物の形を自信たっぷりに答えた。

「詳しく知らない友達に！」

陽鞠のしかめっ面を前に、美乃は考え直す。腕を組み、宙を見上げ、天井の染みを数え……。

「その時期、ギフトコーナーに置いてあるものかな。今なら保冷剤とか。あとは、いつの世も誰に渡してもつき返されない、ハンカチ、

ハンドクリーム……ハンドクリーム？」

「そう、香るもの」

陽鞠は気障ったらしい仕草で美乃を指さした。美乃は小百合の紅茶嫌いに對する真智子の顔を思い返す。

「多分、遠藤のカタログギフトを眺めていたのも、遠藤が何に興味を示すのか知りたかったんでしょね」

「真智子ちゃんが小百合ちゃんに誕生日のお祝いをしようとしていたっていうのは、私もそうだと思う、納得。でも、真智子ちゃん自身がその先入観でもって部屋のをそうだと勘違いしたっていう線はないの？」

「それは、可能性としてないとは言えない。でもそんなに高いものではないと思うわね。私も女子高生が人に贈るものにそんなに心当たりが無い」

「なんてことないタイミングで日々のお礼を渡したっていいんだよ、ひまちゃん！」

「そうね。で、誰に贈ろうとしていたかっていうと……？」

美乃は陽鞠の味気ない反応に気分を損ねたらしく、彼女の問いかけに応えようとしなかった。脚を伸ばし、畳に身体を預ける。その様子に陽鞠はしばし悩んだ後、風呂を勧めた。

「一旦中座よ」

「二人とも中座したら、それはもう中断なんじゃないかな？」

二人は無言で部屋を出た。身体を清め、再び部屋に戻ってくるまでの間、二人は一言も言葉を交わさなかった。あるいはそれが彼女

たちなりのリセットの方法なのかもしれない。

次の登校日、二人は昼休みの間に三年生の教室に足を運んだ。

「誰から行くの？」

「五組、橋本麻里香。一番遠くから行きましょ」

廊下の突き当りから一つ手前の教室に首を突っ込む。すぐ近くにいた生徒が陽鞠を振り返った。

「誰か呼ぶ？」

足元で二人の学年を確認した彼女は、親切に問いかけた。

「橋本麻里香先輩、いらっしゃいますか？」

彼女は教室を見回し、窓際に佇む橋本麻里香を呼び立てた。綺麗に切り揃えられたショートカットが揺れる。麻里香は友人との会話を中断して陽鞠の元へやって来た。陽鞠は美乃と共に麻里香を廊下の人が少ないところへ連れて行った。

「はじめまして、二年の湯ノ宮陽鞠です」

「藤崎美乃です」

二人は名乗り、真智子と寮で親しくしていると述べた。

「近頃、仲井戸佑花演劇部長と、何か個人的に、一対一でのやり取りはありましたか？」

麻里香は突然の訪問に驚きつつも、眉尻を下げ、柔和な態度で答えた。

「部長と？ いや、別に何も……。部長とはクラス違うし、部の中でも役割が違うから、あんまり交流もないしね」

「部の中での役割というのは、どういうものですか？」

「うふふ、何か刑事ドラマみたいね」

メモを構えて詰め寄る陽鞠に、麻里香は目を細めて笑った。彼女曰く、演劇部の活動の大半は、ある程度の班に分かれて作業をするという。指折り数えて説明する。

「役者班、大道具班。小道具班、衣装班、ここは一緒になることも多い。照明班、音響班、シナリオ班。これぐらいかな。一公演ごとに決められるけど、基本的にいつも同じようなメンバーでやってる。二つの班に同時に入る人もいる」

「部長は？」

「役者班」

「橋本先輩は？」

「音響班」

陽鞠はメモ帳に大きく表を作り、班分けを書き留めた。麻里香はそれを少し覗き込む。

「ね、何でそんなこと聞いているの？」

陽鞠はちらと美乃の方を見た。今までずっと黙って陽鞠のするまに任せていた美乃は、急なことにうろろと視線を這わせ、根拠もなく頷いた。それを見て、陽鞠は真智子との話を明かした。

「真智子から、演劇部で起きていること——鍵の紛失と大道具の破壊——について相談されたんです」

「真智子ちゃんが」

麻里香は意外そうに繰り返す。

「鍵が無くなった日、スペアキーで部室の中を確認したそうなんです、そのとき小さな袋を見たと言っています。それが誰かへの贈り物だと、そしておそらくは六、七月生まれの方への誕生日プレゼントだろうと」

「ああ、そんなこと」

麻里香はいつも簡単に応えた。

「それなら和美ちゃんだと思うよ。知ってる？ 一組の三宅和美」

「はい。でもどうしてそんな確信じみた……？」

「あそこは中学から一緒に、仲も良いもん。あなたたち内部生？」

「いえ、高入です」

「じゃ、分かんないかな？ 内部生同士の強い友情。部内だけじゃなくて、それこそ一対一でのお祝いがあってもおかしくないと思うよ」

自身も高入生だという麻里香は、寂しさと憧れの混じった声色で言った。しかし存外その顔は明るい。その後、彼女は二人を一組まで連れて行った。和美を呼び出し、自分の教室に戻っていく。

和美は、急な来訪に戸惑っていた。

先ほどと同じように陽鞠と美乃は名乗る。まず、演劇部内での班を聞く。彼女は麻里香と同じ音響班だと答えた。麻里香にしたものと同じ質問を繰り返す。

「近頃、仲井戸佑花演劇部長と、何か個人的に、一対一でのやり取りはありましたか？」

和美は少し考えてから、首を横に振った。

「いや、特に思いつくことはないけど」

「そうですか」

麻里香と同じように、真智子の情報を開示する。

「六月生まれで私……」

陽鞠は期待の滲んだ目で和美を見ていた。和美はそれを感じながらも、申し訳なさそうに首を横に振った。

「私じゃないと思うよ。今まで一度ももらったことないし……」

陽鞠と美乃は、顔を見合わせた。和美は廊下の窓から見える紫陽花に目を向けていた。

休み時間が終わり、昼食を取り損ねた陽鞠は、回らぬ頭で和美の言葉を反復していた。

内部生同士、六年目の付き合いになるはずの仲井戸佑花と三宅和美の関係に、少なくとも和美自身は重要性を見出していないらしい。麻里香の言葉に嘘はないと感じたが、和美も自信なさげに逸らされた目から故意に騙るような意思は見られなかった。

仲のいい友人という演劇部の部員ばかりで、部内で祝う機会があるから、誰かと直接やりとりをしたことはない。和美は否定した。

陽鞠は、自分のことを顧みた。麻里香の視界に強いバイアスがかかっている可能性を考慮してのことだ。彼女が入学した頃の頃、内部生と揉め事でもあったか。しかし、陽鞠も入学から一年と少し、高入生と内部生の間にある、透明だが明確なラインを意識してきていた。麻里香の言うことが間違っていない。

ゆっくりとすぎる五、六時間目の授業を聞き流して、放課と共に陽鞠は教室を出た。一組の教室で美乃を捕まえると、演劇部の部室へと向かう。

「ひまちゃん、何か分かったの？」

陽鞠の後を追いながら美乃が尋ねた。陽鞠は立ち止まり振り返る。

「何も分かんなかったわよ。分かんなかったから行くのよ」

心なしか楽しそうな声で答える。そしてまた歩き出した。

部室は扉が閉められていたが、中から何から賑やかな声がもれ聞こえてくる。陽鞠は扉の前で襟を正し、一度咳ばらいをすると扉をノックした。

生命の星たちに

深山わたる

【これまでのあらすじ】

恒星HD4628に滞在するくじら座天文探査艦隊第一分艦隊は、二百年前に恒星HD3443に向けて旅立った第一三分艦隊からの通信を受け取る。その内容は第一三分艦隊が原住知的存在の攻撃を受けたというものだった。第一分艦隊は第一三分艦隊の救助のために第一四分艦隊を結成。生物学者のワリス・サマターは防衛部の強硬策を阻止するため、生物参謀として第一四分艦隊に参加する。

2

HD4628を出発してから百五十年が経過した。

くじら座天文探査艦隊第一四分艦隊の十二隻の天文探査船は光速の〇・二倍の速度で惑星間空間を慣性航行していた。すでにHD4628は後方三十光年彼方だ。

十二隻はHD3443から四光年の距離まで接近すると、船首に搭載した百八基のレーザー核融合エンジンを点火した。船首から前方に向けて核融合プラズマが迸り、艦隊が減速していく。HD3443から二光年の距離まで接近した頃には、艦隊の速度は一〇分の一まで落ちていた。

ここはHD3443の重力圏の最外縁だ。外郭小天体群に位置し、惑星間空間に比べて星間物質の密度は桁外れに高い。低速で航行しなければ衝突により船体が破損してしまう。一方、減速し過ぎると星系の中央に到達するまで時間が掛かるので、減速はこの程度に留める必要があった。

艦隊各船は機関を一旦停止し、慣性航行に移行した。

レーダーとレーザーで周囲を観測しながら星系内奥に進む。先行した高速偵察機の報告によればHD3443の原住知的存在はここまでは生活範囲を広げていないようだったが、注意は必要だ。

さらに艦隊各船は船体各部に搭載された補助機関を点火し、進行方向の転換を開始した。百八基の機関による減速噴射はあまりにも明るく、原住知的存在にも簡単に観測できたはずだ。このまま突き進めば待ち伏せを受ける可能性がある。だから僅かでも進路をずらし、異住知的存在の目を欺く必要があった。

この分艦隊の目的は異星の探査ではなく同胞の救出なのだ。

分艦隊は二十年ほどかけて、HD3443から千天文単位の距離まで接近した。この星系の周縁天体群にあたる領域だ。艦隊各船は航行速度をゼロまで落とすため、再び減速噴射を開始した。

減速を開始してから十日後、第一四分艦隊に第一三分艦隊からの通信が届いた。

ワリス・サマターは天文探査船クテシフォンの船内演算装置に構

築された自室で、探査船のセンサーが取得した情報を統合した合成五感に浸っていた。目標の星系に到達するまでは物資の補給ができないため、代替身体は使わずに仮想空間だけで物事を済ませるのが天文探査艦隊の通例だ。

暗黒極寒の宇宙空間の中、艦隊の進行方向に、強い熱源／光源が二つ。一〇分角ほどを隔てて浮かんでいる。第一四分艦隊が向かうHD3443だ。HD3443はG型星の「A」とK型星の「B」による連星で、平均して一〇天文単位ほどの距離を置いて相互に周回していた。知的存在が生息すると思われるのはHD3443Aの第二惑星、通称「ダウティナ」だ。触れてみると固く、嗅いでみると酸素と二酸化炭素と水蒸気の臭いがする。すでに高速偵察機が搭載する望遠鏡によって地表が観測されており、都市の存在が確認されていた。至る所に草の生えた都市に住む彼らがどんな姿形でどんな生態をしているのか、ワリスは早く知りたいところであった。

地表画像をしばらく眺めていると、ワリスの眼前にウィンドウが開いた。司令部からの文章メッセージだ。どうせまた些細な事象の報告だろうと思って通知を消去しようとしたところで、それが第一四分艦隊から通信があったという旨であることに気付いた。ワリスは慌てて文章メッセージを開封した。

通信はレーザーに乗って届いたらしい。内容は天文探査艦隊の正式な形式で書かれた報告書がふたつ。報告書は文章メッセージに添付されていて、「報告書1」を開いてみるとダウティナの原住知的存在の詳細が記述されていた。

第一三分艦隊が命名した呼称は「ピーディアン」。身体構造が地球生態系のムカデに似ているかららしい。しかし生態は地球生態系のウシに似ていて、群で暮らし草を食む。なるほど、都市のあちらこちに草の生えた広場のような空間があるのは、彼らが一日中草を食べて生活しているからか。また仲間意識と縄張意識が強く、外敵には一致団結して立ち向かうという。第一三艦隊が突如攻撃を受けたのも、彼らの警戒心を刺激してしまったためのようなのだ。

ワリスが新鮮な情報に興奮しながら報告書を読んでいると、再び眼前にウィンドウが開いた。今度はアスタルト・ブトラーンからの通信だ。アスタルトはワリスの友人の一人で、心理参謀として第一四艦隊に参加していた。通信は映像が無い音声のみだった。

アスタルトは開口一番に言った。

「会議始まってぞ」

ワリスには何のことか分からない。

「会議？」

ウィンドウからわざとらしく溜息を吐く声が聞こえた。

「どうせ報告書に釘付けになって本文も報告書2も読んでいないんだろ？ 僕が口頭で説明する。報告書2はピーディアンが外縁小天体群にレーザー推進砲台を建設し、恐らくHD4628にミサイルを飛ばそうとしているという内容だ。第一四艦隊はこのレーザー推進砲台を破壊しなければならない。については艦隊時間一六〇〇に会議室Aで幹部会議を始める」

ワリスはまずピーディアンがHD4628を攻撃しようとしてい

ることに驚き、地球人類に対して明確な敵意を持っていることに衝撃を受け、しばしの間思考を停止させた。

そしてワリスの知能構造には探査船搭載のイッテルビウム光格子時計と同期した時計が埋め込まれている。つまり現在の時刻が直感的に分かるわけだが、すでに艦隊時間は一六・三〇を過ぎていた。

「痛恨」

「第一四分艦隊の目的は探査ではなく救出だ。緊張感を持って欲しい」

「わかりましたすぐに現出します」

「頼む」

通信が終了し、ウィンドウが閉じる。ワリスはそれから急いで仮想身体の服装を整え、指定された会議室Aに現出した。

アスタルトに言われた通りなのだ。この艦隊の目的は探査ではなく救出だ。そして今の所、艦隊はピーディアンに敵意を向けられている。第一四艦隊は針の筵の中に飛びこんでいくのだ。

※

ブヌエー・ズロマ・ヒグーギルギュラーはギュラー天視天考群の天視職だ。望遠鏡で濃夜空を眺めて暮らしている。専門は系外気星で、地味な分野ながらもそれなりの業績を上げていた。

それは薄昼期が終わった直後の、久しぶりの濃夜でのことであった。ブヌエーが富草を食みながらある恒星を観測する準備をしていると、濃夜空の一面に見慣れない白い光源を見つけたのだ。しかも普段の濃夜空で一等に明るい恒星よりもずっと明るい。さらに驚いたことに、その光源はブヌエーがまさにトランジット観測の準備をしていた恒星と同じ位置にあった。

ブヌエーは困惑した。このように濃夜空に突然強力な光源が現れるのは新星か超新星だ。しかし件の恒星はチマと同じような色と大きさの恒星で、爆発する恒星ではない。ならばその背後に起こったもっと遠方の新星や超新星が見えているのだろうか。

推測しても仕方が無い。ブヌエーは富草を食みながら光源に望遠鏡を向けた。観測結果をスペクトル分析してみると、件の恒星の光とは全く違う。まず温度が一億度以上ある。件の恒星は五千度ぐらいだから、これは高すぎる。恒星の表面温度としてありえない数字だ。

吸収線も見えたが、最初は意味が分からなかった。しばらく眺めて、ブヌエーはそれらが水素の吸収線とヘリウムの吸収線であることに気が付いた。あまりに大きく青方偏移していたので分からなかったのだ。つまりそれは、光速の五〇パーセントという絶後の速度でダオーチマ系に接近しているということになる。

ブヌエーは富草を食むのも忘れ、子供の頃、刻物語で読んだような光景を思い浮かべる。一億度の高温で輝く光球が、光速の半分という猛烈な速度でここに向かってきている。

否、よくできた刻物語ならもっと別のことを刻むだろう。あれはダオーチマ系に向かって光速の半分の速度で飛翔しながら、噴射し、減速している。一億度というのは核融合炉の温度だ。ルーズンはまだそれを実現していないが、実現すれば炉心の温度はそれぐらいになると聞いたことがある。

それらは核融合ロケットの噴射により減速し、恐らくダオーチマ系に着く頃にピタリと止まるのだろう。それらはここに来訪するのだ。恐らく、件の恒星から。年周視差を測定すればそれがこの目と鼻の先にいることが分かるだろう。

節脳に血が凝り、尾が脈打つのを感ずる。薄く匂いがして、自分が調香を吐いているのが分かった。無理はない。これはとんでもないことだ。ルーズンと比肩する存在がここ以外にもいて、ここに来ようとしているのが分かったのだ。

許せない。ここは、ゴフルは、ダオは、チマは、我々ルーズンの領域だ。それを侵すなど、許せるはずがない。絶対に、ルーズンの全力を結集してであれらを追い返し、叩き返し、付き返し、投げ返し、蹴り返してやるのだ。

ブヌエーはこのことを皆に知らせるため、緑の調香を撒き散らしながら望遠鏡塔を出た。天視本塔に着く頃には、怒れるルーズンは二〇人ほどに膨れ上がっていた。

《続く》

ブログ「語り月夜」と「Twitter」に関するお知らせ

文藝部では「ゆえ」のバックナンバーを掲載するブログ「語り月夜」を運営しております。URL及びQRコードは左記のとおりです。ぜひご利用ください。作品に対するご意見、ご感想は随時受け付けておりますので、コメント欄に書き込んでいただけると幸いです。

また、「Twitter」にて広報を行っております。そちらから「語り月夜」へ飛ぶこともできますので、併せてご覧ください。

その他、ブログに関してご意見、ご感想等ありましたら、下記のアドレスにご連絡ください。

首都大学東京文藝部『語り月夜』

<http://tmubungei-yue.seesaa.net/>



Twitter @tmulc

メールアドレス

tmubungei.yue@gmail.com

編集後記

この度新たにゆえ編集を引き継いだ文藝部二年の西川です。部誌編集は行ったことがあったのですが、連載誌ということでもとんどすることも多かったです。前編集者の丁寧なガイドラインにお世話になりつつなんとかお届けすることが出来ました。

今回はコロナウイルスの影響でゆえもウェブでの公開という形になりました。ゆえ五十七号が掲載されているサイトにゆえのバックナンバーも掲載されております。ぜひ合わせてお楽しみください。

西川知里

文藝部発刊冊子のご紹介

青衿（せいぎん）

主に短編小説を掲載する、文藝部の目玉冊子。
ジャンルも問わず、多種多様な作品が集まる。

ゆえ

本誌。連載作品を掲載する。

新連載はいつでも歓迎。

Freeasy（フリージー）

名前の由来は free+easy

「自由に、簡単に」をモットーに、詩や短編小説などを掲載する。不定期刊行であり、企画者がテーマ決めや寄稿者呼びかけも行う。

文藝部の定期活動「本を読む会」で作られた作品を掲載することもある。

ゆえ 第五十七号

2020年7月29日 第1刷発行

著 者——深山わたる、大塚慎太郎

編 集——西川知里

発行所——東京都立大学 文藝部

東京都八王子市南大沢 1-1 〒192-0397 学生ホール 4階 424

Printed in Japan

落丁本、乱丁本はお取替えいたします。部室に直接お越しいただくか、

tmubungei.yue@gmail.com までご連絡ください。

